

彗星だより

去る十日二十日、コペンハーゲン天文臺なる天文電報中央局より局長ストロエムグレン(O. Strömberg)氏の名で電報が来た。其の電文は

PERIODIC COMET GIACOBINI 16140
OCTOBER 17500 26118 08728 68481
SCHWASSMANN STROMGREN

之れを譯すると、

『週期的ジャコビニ彗星が、十月十六日17時50分、シグスマンによつて発見された。光度は14.0等。位置は赤経 261度13分、北極距離87度28分。シトロエムグレン氏発信。』

赤経赤緯は通常の言ひ方に換へると、

赤経 17時24分52秒

赤緯(北) 2度32分

となる。シグスマン(A. Schwassmann)氏は永く獨逸のベルゲドルフ村のハムブルグ天文臺に居る天文家であつて、平生、同所のリヘルト寫眞望遠鏡を使つてゐる人であるから、今度の発見もこれでやつて成功したものだらう。尤も、此の頃は同天文臺の勤勉な觀測家であるW.パーデ氏が米國旅行中であるから、其の不在中、シグスマンが徑300センチの大反射鏡を使つてゐるかも知れないが。

ジャコビニ彗星は今1926年に近日點へ歸來する筈であるから、年末には誰かが之れを発見するだらうとは、我が天界の第61號第80頁にも記した所であつた。英國のB. A. A. 協

會の年鑑(Handbook)にも、近日點通過の日を1926年12月3日及び同年同月11日を假定して、九月6日から十二月27日までの觀測位置を掲げ觀測家の便に供してゐる。此の度、シグスマン氏が発見した位置は、上記の Handbook に、近日點通過を十二月11日として算出して載せてある位置即ち

十月16.0日の 赤経=17時23.8分

赤緯=(北)2度44.8分

に極めて近い。少しく念を入れて計算した所によると、シグスマン氏の発見位置を正しいものとすれば、此の星の近日點通過の最も確からしい時日は、

1926年12月11.85日

となる。此の假定の下に、今後の彗星の位置は計算して本會のブレンテンに載せてあるから見て貰ひたい。

ジャコビニとは、1896年から1900年頃までフランスのニース天文臺に居た人で、十一年間に12個の新彗星を発見した熱心家である。其のうちに週期彗星が二つあるが、こゝに言ふ彗星は一般に「第二ジャコビニ彗星」と呼ばれ、1900年12月20日に発見されたものである。此の時は、翌1901年の二月まで、約八週間にわたつて觀測されたが、ナルフ彗星や、バーナード彗星(1892第五)と軌道が好く似てゐるといふ評判であつた。實際、軌道要素を比較して見ると、

	ジャコビニ彗星 (1900 III)	バーナード彗星 (1892 V)	ナルフ彗星 (1884 III)
近日點の引數	171° 6'	169° 53'	172° 42'
昇交點の黄經	196 43	206 26	206 19
軌道面の傾斜	29 51	31 19	25 16
近日點の距離(對數)	9.96935	0.15637	0.19644
離心率	0.7417	0.5880	0.5609
週期	6.524	6.634	6.774
軌道計算者	W. Abold	J. R. Hind	M. Kamensky

故に、此の三つの彗星は、同一のものゝ再現では無いけれど、さにかく、殆んど同じ軌道の上を動いてゐる一族關係のものである。

1907年に此のジャコビニ彗星は近日點へ歸つて來た筈であるが、太陽の向ふ側にあつたため、地球からは発見されなかつた。又いで1913年の10月23日、ドイツのバンベルヒ市に居たチンナー(Zinner)氏が偶然見付け出した

一彗星が、計算の結果、ジャコビニ彗星と同じものであることが確かめられた。チンナー氏が見た時は光度が9等級で、二三十分の尾を見せてゐた。此の星は同年12月25日の夜まで觀測が行はれた。

1920年には、又1907年の時と同様な事情で発見されなかつた。そして、いゝ々々今1926年に、第三回日の出現として発見されたので

ある。

今年の發見當時は光輝が非常に弱かつたが其の後、太陽へも、地球へも、近づいて来る

1896 e=1896 V

1898 g=1898 V

1899 e=1899 V

1900 a=1900 I

1900 c=1900 III

1902 d=1903 II

1903 a=1903 I

1904 d=1604 II

1905 a=1905 III

1905 c=1906 I

1907 a=1907 I

1907 c=1907 III

から、幾らか大きい光になるだらう。

因みに、ジャコビニが發見した十二箇の彗星は

1896年 9月 4日發見 (第一週期星)

1898年 6月16日同

1899年 9月19日同

1900年 1月31日同

1900年12月20日同 (第二週期星)

19 2年12月 2日同

1903年 1月15日同

1904年12月17日同

1905年 3月26日同

1905年12月 6日同

1907年 3月 9日同

1907年 6月 1日同

さて又、去る十一月八日、東京に於いて汎太平洋學術會議開會中に、コペンハーゲンより達した電報に據れば、去る十一月四日の夜十二時近く、スペイン國パルセロナ市フアラ天文臺長コマスソラ(Comas Sola)氏は

赤經 2時57分 (毎日15'づつ増加)

赤緯 6度31分(北) (同 6' 南へ)

の天に光度 12.0 級の一彗星を農見したさいふ。之れは1926 f であるが、多分、新彗星であるう。

雜

報

●**山本博士の新著成る** 山本一清博士が昨年歸朝早々、東京新光社の依頼を受けて、萬有科學大系の第一巻のために執筆せられた「天體と宇宙」は去る七月末いよいよ美裝して發行せられた。全部で338頁、總アート紙で、366個の寫眞や圖畫さ、無數の表とを入れ、内容は皆1926年五月現在の最も新しい材料を用ゐてゐる。今は叢書の一部であるが來年あたり單行本となるであらう。

●**トルコで新曆採用** ナウエン無線局の報道によれば、アンゴラのトルコ國民議會は來(1927)年一月一日からキリスト教曆即ち現今世界一般にひろく行はれるグレゴリ曆を採用することを決議した。現在の回教曆では去る七月十二日から紀元第1345年が始まつたわけであるが、上記の改曆により、來年一月一日からは回教曆としては第1346年が始まることとなる。故に第1345年は百七十三日目で終るのである。

●**中村氏の反射鏡製作法** 中村要氏が去る七月以來の科學畫報に連載されつゝあ

る反射鏡製作法は一般讀書界及びアマチニア天文家の間に大きなセンセーションを起してゐる。

●「ヘリウムと太陽熱」への追補

七月號の天界にのせて頂いたあの拙文は私が大正十三年十一月一日支部例會で講演せるものですから文中「昨年の初め頃」とあるのは勿論大正十二年の初めの意であります。それから水銀原子の遊星電子を一個除くさ金の原子になることを述べましたが嚴密に云へば遊星電子を一個除いただけでは金の原子にならないで單にイオン化せられた水銀の原子を得ます。遊星電子一個を除くと同時に其の原子核の電氣量をも變化させて原子を電氣的に中和した状態にして始めて金の原子が得られます。最近アムステルダム大學のスミット氏は鉛を變じタリウム及水銀を得る事を報じて居ります。長岡博士の水銀より金への變換を是れに結びつけるさ往時のアルケミストの夢は實現されたことになります。(札幌 米田勝彦)